

## 「自己責任的信念」をめぐる関連変数の探索的検討

柴内 康文

### 問題

本稿の目的は、「自己責任的信念」の規定因およびそれと関連する心理変数等について分析した柴内（2021）の枠組みに基づいて、そこで用いたデータに対して同分析では扱わなかった変数との関連について探索的に検討することにある。

近年、巷間にも（主に批判的に）議論されることの多い「自己責任」については、個人の成し遂げた成功や犯した失敗がその行為や能力に主として起因するものであるという感覚の社会的伸長がもたらす問題点が、思想的立場からも議論されるようになってきている（e.g. Mounk（2017）、Sandel（2007, 2020）など）。この「自己責任」（また能力主義）的な信念を人々がどの程度保有し、また諸信念や態度等との関連がいかに見られるのかについて、「アジアンバロメータ調査」第5波日本データ（以下 ABS5）を用いて検討したものが柴内（2021）である。

そこでは具体的には、ABS5 から主に伝統的価値観を測定する Q34 に含まれる項目 11 「裕福になるか貧しくなるか、成功するか、失敗するかはすべて運命によって決まっている」、および現在の世帯年収が自分また家族の努力によって得られた公平な結果であるという認識を測定する Q76 「あなたとご家族がこれまで費やしてきた努力や苦勞を考えたとき、現在得ている世帯の収入は公平なものだと思いますか。それとも公平でないと思いますか」の二つの質問項目を用いて、前者に対し「どちらかといえば反対」（507 名、48.5%）および「強く反対」（210 名、20.1%）し、かつ後者に対し「とても公平である」（24 名、2.3%）および「公平である」（574 名、54.9%）と回答した者を自己責任的・能力主義的信念を有しているとし（438 名、49.0%）、この 2 質問にそれ以外の、DK/NA を除く有効反応をした者（456 名、51.0%）との比較を行っている。デモグラフィック変数等を中心とした自己責任的信念の規定要因の分析からは、女性がそれを持ちにくく、一方で（高卒に対し）専門学校・短大卒および大卒以上といった高学歴の場合に、また家族の主観的な社会的地位や家族年収が高い場合にそれを持ちやすいことが明らかになっている。さらに、これらの変数を統制した上で検討した自己責任的信念と現在の所得配分や社会のグローバル化に対する認識、あるいは各種の社会・政治意識との関連については、自己責任的信念を有する者は現在の日本の所得配分

## 「自己責任的信念」をめぐる関連変数の探索的検討

を公平と考えるとともに、格差縮小に対しての政府責任を低く見積もる傾向があること、また外国人労働者の受け入れという側面におけるグローバル化に賛成しやすいこと、また一般的信頼は高かったが、政治的効力感を高く持つことはない一方で政府は良好に機能していると考えられる傾向があることなどが見出されている。

ただし、これらの検討においては自己責任的信念と直接的な関連の想定しやすい諸変数に分析の主眼が置かれていた側面があり、本論文ではこのような信念がいかにかに形成され、またどのように社会に影響を与える可能性があるのかについての示唆を得るべく、社会的ネットワーク、メディア接触、宗教心、社会参加など、特に ABS5 において特徴的に取得された変数との関連について探索的に検討しようとするものである。

## 方法

データ アジアンパロメータ調査第5波日本データ (ABS5)。<sup>1)</sup> 調査は2019年7月～9月に全国100地点、計画サンプル3000人の男女20～79才の日本人を対象にCAPI (Computer-Assisted Survey Interviewing) 方式によって行われた。最終的に得られたデータは1045人だった。

分析枠組み 前述の通り、柴内 (2021) では ABS5 から「自己責任的信念」を有する者とそうでない者を操作的に定義している (438 名対 456 名)。この 2 値変数、および統制のために用いた性別 (2 値)、年齢 (20～89 才)、婚姻状態・有職状態・学歴 (高卒以下をベースカテゴリとした専門学校・短大卒および大卒以上、以上 2 値)、家族の主観的社会的地位 (10 段階)、家族年収 (5 段階) のデモグラフィック変数を独立変数とし、次項で取り上げる各変数を従属変数とする分析を行った。なお従属変数が 2 値である場合はロジスティック回帰分析、4 段階である場合は順序ロジットモデルとして結果を表記している。

変数 本論文の分析枠組みにおいて、特に従属変数として設定するものについて以下で記述する。原則として「わからない」「答えない」回答については欠損値として扱い、それを含む場合には分析から除外した (なお「団体組織加入数」については、何らかの団体を挙げた数を 3 つまで累積しており、どれも挙げなかった場合に場合に 0 となっている)。また各変数については数値の大きいことが質問文の表現する意味をより持つように適宜尺度の反転を行った。

### 【社会的ネットワーク】

【団体組織加入数】(Q8) 19 種類の団体・組織の加入状況について 3 つまで回答したものを挙げた個数を用いた。

【平日接触相手】(Q12) 平日に 1 日あたり何人くらいの知り合いと接触するかについて 5 段階で尋ねた項目について、「50 人以上」の回答 (3.6%) を「20～49 人」とあわせ 4 段階

としたものを用いた。

〔家族外援助相手〕(Q15) 重大な問題に直面したときに家族・世帯以外に助けを求められる人数の多寡について4段階で尋ねたものを用いた。

〔異意見相手話しにくさ〕(Q16) 友人・同僚等と政治的会話の場面において意見が異なる場合の話しにくさを感じる程度について4段階で尋ねたものを用いた。

#### 【インターネット利用】

〔ソーシャルメディア利用〕(Q28・Q29) ソーシャルメディアの利用有無について有効な回答した者のうち、その利用目的として「誰かとつながるため」「政治について自分の意見を表明するため」「ニュースや情報をシェアするため」「仕事で利用」の4項目(MA)で尋ねたものについて、その選択の有無を用いた(各2値)。

〔政治情報源：ネット〕(Q30) 「政治や政府に関する情報を得るために最も重要な情報源」として、「テレビ」から「その他」まで5種類のメディアを選択するよう求めた項目で「インターネットおよびソーシャルメディア」を挙げたかどうかを用いた(2値)。

#### 【宗教心】

〔宗教有無〕(F6) 現在の宗教について尋ねた項目により、「なし」ではなく何らかの回答があったかどうかを用いた(2値)。

〔宗教実践頻度〕(F7) 日常生活における祈りや宗教的習慣を実践している頻度について「1日に何度か」から「まずしない」の8段階で尋ねた項目を、分布を考慮したうえで「1日に1回以上」「月に1回以上」「年に数回以下」「まずしない」の4段階に再構成したものを用いた。

〔信心深さ〕(F8) 宗教儀礼出席は別として自身を「信心深い」と思うかについて4段階で尋ねた項目を用いた。

#### 【伝統的価値観・政党支持】

〔価値観・政治的意見〕(Q34・Q69) 家族、集団と個人などをはじめとした主に伝統的価値観について12項目4段階で尋ねたQ34(ただし、「自己責任的信念」の構成に用いた項目(11)「裕福になるか貧しくなるか、成功するか、失敗するかはすべて運命によって決まっている」を除外した)、および主に政治のあり方を中心とした伝統的意見について10項目4段階で尋ねたQ69を分析に用いた。以下の結果の提示においては「自己責任的信念」との間で有意な関連が得られたものについて報告し、関連の見られなかった項目については考察で論じる。

〔自民党支持〕(Q32) 「もっとも身近に感じる政党」について尋ねた質問において自民党を、他党もしくは「身近に感じる政党はない」ではなく挙げたかどうかを用いた(2値)。

「自己責任的信念」および上記で説明した各変数の記述統計量について表1に示す。<sup>2)</sup>

「自己責任的信念」をめぐる関連変数の探索的検討

表1 各変数の記述統計量

変数	N	平均	標準偏差	最小値	最大値
自己責任的信念	894	0.490	0.500	0	1
団体組織加入数	1045	1.283	1.157	0	3
平日接触相手	1043	2.116	1.040	1	4
家族外援助相手	1015	2.226	0.666	1	4
異意見相手話しにくさ	946	2.465	0.865	1	4
SNS利用：つながり	855	0.524	0.500	0	1
SNS利用：意見表明	855	0.013	0.113	0	1
SNS利用：シェア	855	0.292	0.455	0	1
SNS利用：仕事	855	0.132	0.339	0	1
政治情報源：ネット	1035	0.205	0.404	0	1
宗教有無	1026	0.365	0.482	0	1
祈禱等頻度	1033	2.233	1.150	1	4
信心深さ	1020	2.050	0.897	1	4
長期の人間関係	950	2.926	0.630	1	4
子どもの従順さ	983	1.983	0.682	1	4
自意見への非固執	958	2.625	0.609	1	4
男児志向	776	2.032	0.766	1	4
教育と政治発言権非関連	990	3.084	0.736	1	4
多団体による調和崩壊	860	2.312	0.695	1	4
自民党支持	975	0.448	0.498	0	1

結果

【社会的ネットワーク】

社会的ネットワーク関連変数に関する分析結果を表2に示す。団体・組織への加入は年長者、女性、婚姻者で多く、また大卒で年収の高い者が多い。平日の接触相手数は年長者で少なく、仕事をしている者や年収の高い者で多くなる。ただし家族外で援助をしてくれる相手の数も含め、これら社会的ネットワークに関わる変数については自己責任的信念を有することとの間で有意な関連は見られなかった。一方で、「友人や職場の同僚と政治の話をするときに、その相手と自分の意見が異なる場合、話しにくいと感じる」かどうかという、社会的ネットワーク内における意見不一致に対する抵抗感については、デモグラフィック変数の統制後にも自己責任的信念を有する者の方がそのような抵抗感を感じにくいという結果となっていた。

表2 社会的ネットワークとの関連

	団体組織加入数		平日接触相手		家族外援助相手		異意見相手話しにくさ	
	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.
自己責任的信念	-0.004	(0.147)	0.098	(0.151)	0.029	(0.161)	-0.361	(0.153)*
年齢	0.015	(0.005)**	-0.019	(0.006)***	-0.007	(0.006)	0.005	(0.006)
性別(女性)	0.308	(0.151)*	-0.010	(0.156)	0.129	(0.167)	0.071	(0.161)
婚姻状態(あり)	0.627	(0.172)***	0.132	(0.178)	-0.038	(0.190)	0.079	(0.182)
有職状態(あり)	0.217	(0.177)	1.800	(0.197)***	-0.028	(0.195)	-0.052	(0.186)
学歴(専門・短大)	0.117	(0.182)	-0.204	(0.186)	0.014	(0.197)	-0.074	(0.186)
学歴(大卒以上)	0.448	(0.182)*	-0.175	(0.188)	-0.051	(0.199)	0.428	(0.189)*
家族社会的地位	0.013	(0.052)	-0.039	(0.055)	0.020	(0.058)	-0.028	(0.055)
家族年収	0.125	(0.061)*	0.183	(0.064)**	0.109	(0.067)	0.029	(0.064)
カット1	1.299	(0.500)	-0.245	(0.516)	-2.116	(0.553)	-1.933	(0.542)
カット2	2.495	(0.507)	1.357	(0.519)	0.938	(0.546)	0.419	(0.537)
カット3	3.246	(0.513)	2.803	(0.524)	3.757	(0.593)	2.058	(0.543)
Log-likelihood	-893.130		-797.373		-649.478		-788.070	
Nagelkerke R2	0.068		0.280		0.014		0.023	
AIC	1810.260		1618.746		1322.957		1600.141	
N	672		672		661		643	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

【インターネット利用】

年齢が高くなるとソーシャルメディアの各種利用や政治情報源としてインターネットの利用が少なくなる、女性の方がソーシャルメディアを誰かとつながるために、また有職者の方が仕事のために利用しやすいなどの関連は得られているが、自己責任的信念を有することによる、ソーシャルメディアをはじめとしたインターネット利用との特異的な関連は見出されなかった(表3)。

表3 インターネット利用との関連

	SNS利用：つながり		SNS利用：意見表明		SNS利用：シェア		SNS利用：仕事		政治情報源：ネット	
	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.
自己責任的信念	-0.012	(0.188)	0.064	(0.749)	0.233	(0.196)	0.204	(0.261)	-0.268	(0.209)
年齢	-0.036	(0.007)***	-0.018	(0.027)	-0.029	(0.008)**	-0.026	(0.010)*	-0.034	(0.008)***
性別(女性)	0.931	(0.195)***	0.191	(0.742)	0.107	(0.202)	0.037	(0.266)	-0.527	(0.215)*
婚姻状態(あり)	0.492	(0.230)*	-0.795	(0.849)	-0.125	(0.233)	-0.079	(0.307)	-0.156	(0.240)
有職状態(あり)	0.138	(0.232)	-1.387	(0.773)	0.273	(0.251)	1.190	(0.458)**	0.404	(0.278)
学歴(専門・短大)	-0.057	(0.226)	0.835	(0.967)	0.299	(0.234)	0.546	(0.313)	0.124	(0.259)
学歴(大卒以上)	-0.209	(0.225)	0.785	(0.922)	0.366	(0.235)	0.310	(0.323)	0.354	(0.248)
家族社会的地位	0.136	0.0697	0.722	(0.252)**	0.024	(0.073)	-0.029	(0.101)	0.041	(0.077)
家族年収	0.051	0.0796	0.276	0.3145	0.018	(0.083)	0.173	(0.113)	-0.014	(0.088)
(定数項)	0.270	(0.627)	-7.801	(2.562)**	-0.008	(0.647)	-2.329	(0.934)*	0.290	(0.691)
Log-likelihood	-359.820		-38.990		-337.690		-214.364		-312.703	
Nagelkerke R2	0.171		0.170		0.091		0.120		0.121	
AIC	739.641		97.981		695.381		448.728		645.406	
N	578		578		578		578		671	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

「自己責任的信念」をめぐる関連変数の探索的検討

表 4 宗教心との関連

	宗教有無		祈禱等頻度		信心深さ	
	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.
自己責任的信念	-0.053	(0.170)	-0.191	(0.149)	0.034	(0.148)
年齢	0.031	(0.007) ***	0.047	(0.006) ***	0.023	(0.006) ***
性別 (女性)	-0.119	(0.177)	0.381	(0.155) *	0.373	(0.155) *
婚姻状態 (あり)	-0.418	(0.200) *	-0.344	(0.176)	-0.191	(0.176)
有職状態 (あり)	-0.069	(0.206)	-0.231	(0.183)	-0.200	(0.181)
学歴 (専門・短大)	-0.067	(0.212)	-0.054	(0.186)	-0.233	(0.182)
学歴 (大卒以上)	-0.045	(0.211)	0.044	(0.185)	-0.057	(0.183)
家族社会的地位	0.008	(0.061)	0.070	(0.053)	0.079	(0.054)
家族年収	0.076	(0.072)	0.102	(0.063)	0.156	(0.062) *
カット 1	(定数項)		2.331	(0.522)	1.269	(0.515)
カット 2	-2.008	(0.594) ***	3.716	(0.535)	2.880	(0.525)
カット 3			4.443	(0.542)	4.954	(0.553)
Log-likelihood	-425.611		-828.870		-807.773	
Nagelkerke R2	0.070		0.164		0.062	
AIC	871.221		1681.740		1639.547	
N	667		671		667	

\*\*\* p<.001, \*\* p<.01, \* p<.05

【宗教心】

おおむね年齢の高い者の方が宗教を有しており、その実践頻度も高くまた信心深いと回答していて、また女性の方が実践頻度や信心深さが高いなどの傾向が見られるが、自己責任的信念との間にこれら宗教心との関連は基本的に見られないという結果となっていた (表 4)。

【伝統的価値観・政党支持等】

伝統的価値観 (Q34) との関連について検討した分析からは (表 5), 「自己責任的信念」を有する者は「人と付き合うときは、長期にわたる人間関係を深めることが、目先の利益を守ることよりも重要だ」(項目 4) に賛成しやすく、「たとえ理不尽でも、子どもは親の要求に従うべきだ」(項目 5), 「職場の同僚たちが反対するのであれば、自分の意見に固執するべきではない」(項目 10), 「子どもを 1 人だけ持つならば、女の子よりも男の子の方が良い」(項目 12) に対しては反対しやすいことが見いだされている。

また、主に政治に関わる伝統的意見 (Q69) との関連からは、「教育のない人でも、高い教育を受けた人と同じくらい、政治に対して発言権を持つべきだ」(項目 3) に賛成する一方で、「人々が多くの団体を組織すると、地域の調和が崩れるだろう」(項目 6) に対しては反対しやすいという結果となっていた。

最後に政党支持に関わる変数について、「最も身近に感じる政党」として自民党を挙げることと「自己責任的信念」の間には有意な関連が見いだされ、そのような者が自民党を身近に感じやすいという結果となっていた。

表5 価値観、政党支持との関連

	長期の人間関係		子どもの従順さ		自意見への非固執		男見志向		教育と政治発言権 非関連		多団体による 調和崩壊		自民党支持	
	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.	b	s.e.
自己責任的信念	0.457 (0.173) **		-0.324 (0.160) *		-0.412 (0.165) *		-0.491 (0.169) **		0.346 (0.157) *		-0.343 (0.164) *		0.359 (0.166) *	
年齢	0.020 (0.006) **		0.005 (0.006)		0.012 (0.006) *		0.010 (0.006)		0.016 (0.006) **		-0.004 (0.006)		0.008 (0.006)	
性別 (女性)	0.274 (0.177)		-0.560 (0.166) ***		0.140 (0.170)		-0.891 (0.181) ***		0.152 (0.162)		-0.076 (0.170)		-0.216 (0.172)	
婚姻状態 (あり)	-0.306 (0.203)		-0.013 (0.186)		0.374 (0.191) *		0.031 (0.198)		0.037 (0.187)		0.327 (0.193)		0.068 (0.196)	
有職状態 (あり)	0.550 (0.207) **		-0.498 (0.190) **		-0.192 (0.203)		-0.171 (0.203)		-0.279 (0.191)		-0.148 (0.199)		0.022 (0.203)	
学歴 (専門・短大)	-0.050 (0.208)		0.363 (0.195)		0.146 (0.202)		-0.136 (0.209)		0.007 (0.193)		-0.018 (0.200)		-0.082 (0.207)	
学歴 (大卒以上)	0.363 (0.214)		-0.304 (0.199)		-0.111 (0.203)		-0.234 (0.212)		0.187 (0.196)		-0.846 (0.207) ***		-0.324 (0.207)	
家族社会的地位	0.111 (0.061)		-0.001 (0.057)		0.012 (0.060)		-0.002 (0.062)		-0.150 (0.057) **		0.083 (0.060)		0.084 (0.060)	
家族年取	-0.137 (0.072)		0.131 (0.066) *		-0.023 (0.069)		0.031 (0.071)		0.028 (0.065)		-0.006 (0.069)		0.170 (0.070) *	
カット1	-2.153 (0.625)		-1.493 (0.536)		-2.770 (0.597)		-1.614 (0.573)		-3.277 (0.571)		-2.492 (0.569)		(定数項)	
カット2	0.329 (0.575)		1.259 (0.535)		0.148 (0.565)		1.036 (0.570)		-1.224 (0.532)		0.299 (0.556)		-1.571 (0.576) **	
カット3	3.735 (0.600)		4.881 (0.691)		4.396 (0.617)		3.048 (0.598)		1.378 (0.533)		3.585 (0.606)			
Log-likelihood	-585.862		-651.550		-571.138		-605.456		-693.776		-607.866		-436.748	
Nagelkerke R2	0.056		0.048		0.048		0.083		0.050		0.057		0.048	
AIC	1195.723		1327.100		1166.276		1234.912		1411.551		1239.731		893.495	
N	652		664		664		568		661		607		649	

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05

## 考察

本分析からはまず、団体組織への加入や、平日の接触相手数、あるいは家族外に助けを求められる人の数といった、各種の社会的ネットワークの拡がりの量的側面については自己責任的信念との関連が見られないという結果となっていた。すなわち、達成の成功・失敗について行為者個人の成果あるいは責任を重視するような心的傾向を持つことが、いわば自己・個人中心的な視点からの社会的つながりの縮退とリンクしているというようなことは、国内の本データの分析においては見られないといえることができる。ここで「友人等との政治的会話場面において意見が異なる場合の話しにくさ」については、自己責任的信念を持つ者ほどそのような話しにくさを感じないという結果となっており、この点については価値観等変数における関連とあわせて後述する。

またソーシャルメディアをはじめとしたネット利用についても、自己責任的信念との関連が見られないという結果となっていた。社会的ネットワーク関連変数と同様に、自己責任に重きを置くような傾向性が、レコメンデーションや自己選択を通じて個別化された情報環境の利用、接触との間で特段の関連を持っているということも見られなかったといえることができる。

自己責任的信念は、運命論的な社会認識に対して自己の選択とその結果の受容を重視するという意味合いがあり、本分析における自己責任的信念の操作的構成においても運命論的幸福・達成観である Q34 項目 11 に対して否定的に反応していることを用いている。そのような観点から運命論的信念の形成に関わる関連変数として所属（宗派）、行動（祈り等の実践）、信念（信心深さ）の 3 つの側面からの宗教・信仰関連変数との関連について検討した。<sup>3)</sup> しかしながらこれらのどの側面においても本データ分析において自己責任的信念との関連は見いだされなかった。現在の国内における宗教的信念が、どの程度他の信念構造へとつながりを有するものなのかについて検討を促すような興味深い側面があるといえるだろう。

自己責任的信念との関連がいくつかの項目で見られるのが、価値観等をはじめとした項目群である。まず自己責任的信念を有する者は、「たとえ理不尽でも、子どもは親の要求に従うべきだ」（Q34 項目 5）、また「子どもを 1 人だけ持つならば、女の子よりも男の子の方が良い」（Q34 項目 12）という項目に反対しやすい。これらを保守的、守旧的な伝統的価値観と捉えれば自己責任的信念を有する者はよりリベラルな反応をしやすいと考えることができるが、一方でこれらについては、自律性を重視し、「理不尽なこと」あるいは選択しえないことに対して何らかの判断を外部から強制されることに対する抵抗感がこういった信念を持つ者には出現しやすいと考えることができるかもしれない。このことは他項目に対する反応からも考察することが可能である。例えば、「職場の同僚たちが反対するのであれば、自分



の意見に固執するべきではない」(Q34 項目 10) に対して、自己責任的信念を有する者は反対しやすい(「固執するべき」と考える)傾向があるという結果が得られていた。またこれと関連して前述の社会的ネットワーク関連変数に関するところで記したように、このような信念を持つ者はまた同時に「友人等との政治的会話場面において意見が異なる場合」に話しにくいと感じることもなかった。すなわちこれら 2 質問からは、自己責任的信念を有する者は意見の異なる他者の中にあっても自分の自由な意見表明を重視する傾向があるという結果となっていた。

このような関連は、政治に関わる各種意見に対する反応からも読み取ることができるように思われる。例えば自己責任的信念を有する者は「教育のない人でも、高い教育を受けた人と同じくらい、政治に対して発言権を持つべきだ」(Q69 項目 3) に対して賛成しやすい一方で、「人々が多くの団体を組織すると、地域の調和が崩れるだろう」(Q69 項目 6) に対しては反対しやすいという関連が得られている。前者については、教育水準が低いということによって自由な発言が阻害されることに対する抵抗感、後者については団体を組織する、という自由であるべき行動に対してネガティブな帰結が予想されることに対する否定とも捉えることができるだろう。

これら関連が有意となった質問項目の特徴を概観したときに想起されるのは、自己責任的信念と、社会心理学において検討されてきた自由の侵害に対してそれに抵抗し回復を目指すとする動機付けであるいわゆる「心理的リアクタンス」(Brehm, 1966) との関連である。「自己責任」がそれを取りうるそもその前提として、個人による自由な行動選択の十全さに立脚していると考えれば、その前提を脅かすものに対する抵抗感がこの信念を持つ者に生起することは自然なことであるように想定できるだろう。この心理的リアクタンスは説得に対する抵抗という観点から従来研究されることが多かったが、他の心理的傾向、文化的特性との関連を分析した研究として今城(2002)を挙げることができる。そこでは 2 種類のリアクタンス尺度と独自性欲求との間に正の相関、集団主義傾向との間に負の相関があることが見いだされており、リアクタンス現象は個人主義と結びつきやすく、日本のようないわゆる集団主義文化圏でそれが起こりにくい可能性が示唆されている。しかし、本論の分析からは集団主義、すなわち集団と個人の目標や利害が対立する場合に集団のそれを優先する傾向と自己責任的信念との間には関連を見いだすことはできなかった。すなわち伝統的価値観に関する質問に含まれていた「家族のためには、自分の個人的な利害は二の次にすべきだ」(Q34 項目 1)、「集団の中では、全体の利益のために個人の利益を犠牲にするべきだ」(Q34 項目 2)、「国益のために、個人の利益は犠牲にしてもよい」(Q34 項目 3) などのような個人主義対集団主義に関わるような項目群については、表 5 と同じ分析枠組みにおいて自己責任的信念の有無との関連は得ることができなかった。ABS5 データを用いた本分析において自己責任的信念を有する者については、個人と集団のトレードオフの問題が、個人的自由、

## 「自己責任的信念」をめぐる関連変数の探索的検討

自律に対する制約とリンクするものであると捉えられているわけではないことが示唆されているともいえるだろう。これが自己責任的信念という概念の持つ、個人主義的傾向とはある程度次元を異にする特徴であるのか、あるいはこの二者間の関連性の変化が例えば過去20年間の日本の社会状況変動の中で起こったものであるのかについては検討の価値があるように思われる。本分析では「人と付き合うときは、長期にわたる人間関係を深めることが、目先の利益を守ることよりも重要だ」(Q34 項目4)という、対人関係において短期的利益ではなく長期的視点を重視するという傾向が自己責任的信念と関連を有していたが、上記の点とあわせこの関連を考察することは価値あることであるかもしれない。

さらに自己責任的信念は「親しみを感じる」という教示文による(他政党、また支持なしに対する)自民党支持と有意に結びついていた(表5)。個人行動の自由とその帰結の個人的受容を重視する傾向性と自民党支持との関連については直感的に理解しやすくはあるものの、前述の通り比較的リベラルとも捉えられる価値観、意識項目との関連も見られることから、現在の政党認知や与党/自民党支持の構造との関連について検討することも意義あることのように思われる。<sup>4)</sup>

本分析においては、国内サンプルを対象とした自己責任的信念の関連変数に関して、いくつかの知見が得られた。まとめると、社会的ネットワークやメディア利用のような他者、社会環境との相互作用に関わる変数との関連は特に見いだされず、また運命論的信念を規定する可能性のある宗教関連の意識行動との関連も存在しなかったが、とりわけ個人の選択や行動の自由、自律性との関連が複数の測度において見られる一方で、集団主義と対置される概念としての個人主義的傾向とは独立性を有する可能性が示唆された。これらをふまえて自己責任的信念の概念と測定方法の再検討に取り組む必要があるだろう。<sup>5)</sup> 特にこの信念に関わる国際比較からは、該当者の比率やその内実がさまざまに異なっていることが柴内(2021)からも示唆されており、今回の分析によって関連した、また関連しなかった諸変数の各国データによる検証はとりわけ有益なものになると考えられよう。

※本論は、2020年度の東京経済大学国内研究の研究成果である。

### 注

- 1) ABS5 データは JSPS 科研費 JP18H03664 により取得されている。ABS5 の詳細またそれを用いた研究成果については池田(2021)に示されている。また ABS5 質問票および質問項目(CAPI 調査の元となった原版ファイル)については、以下サイトにて参照可能である。  
<https://www.keisoshobo.co.jp/book/b592509.html>
- 2) 本論の分析で使用した他のコントロール変数の記述統計量については柴内(2021)に掲載されている。
- 3) これはしばしば、宗教傾向に関わる分析において“belonging, behaving and believing”の「3

つのB] (“Three Bs”) と呼ばれているものに近いと考えられる。分析例として Putnam & Campbell (2012) を参照。

- 4) なお、一般的なイデオロギーの保革自己同定については、ABS5 においては関連する質問項目が存在しなかったために検討することができなかった。
- 5) 本論とは問題の所在が異なるが、達成のための非認知的能力の一環として捉えた自己責任尺度の作成の例として Mergler & Shield (2016) がある。

## 文 献

- Brehm, J. W. (1966). *A theory of psychological reactance*. Academic Press.
- 池田謙一 (編) (2021). 日本とアジアの民主主義を測る 勁草書房
- 今城周造 (2002). リアクタンス特性と集団主義・独自性・説得効果の関係 心理学研究, 73, 366-372.
- Mergler, A., & Shield, P. (2016). Development of the personal responsibility scale for adolescents. *Journal of Adolescence*, 51, 50-57. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.adolescence.2016.05.011>
- Mounk, Y. (2017). *The age of responsibility: Luck, choice, and the welfare state*. Harvard University Press. 那須耕介・栗村亜寿香 (訳) (2019). 自己責任の時代：その先に構想する、支えあう福祉国家 みすず書房
- Putnam, R. D., & Campbell, D. E. (2012). *American grace: How religion divides and unites us*. Simon and Schuster. 柴内康文 (訳) (2019). アメリカの恩寵 柏書房
- Sandel, M. J. (2007). *The case against perfection: Ethics in the age of genetic engineering*. Belknap Press /Harvard University Press. 林芳紀・伊吹友秀 (訳) (2010). 完全な人間を目指さなくてもよい理由 ナカニシヤ出版
- Sandel, M. J. (2020). *The tyranny of merit: What's become of the common good*. Farrar, Straus and Giroux. 鬼澤忍 (訳) (2021). 実力も運のうち 能力主義は正義か? 早川書房
- 柴内康文 (2021). 「自己責任的信念」の規定因およびその帰結 池田謙一 (編) 日本とアジアの民主主義を測る 勁草書房 pp. 89-106.